

日本の大学機関における「韓国語学習」

——愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関する アンケート結果とその分析(2)——

文 嬉 眞・金 美 淑

1. はじめに

本稿は、「日本の大学機関における「韓国語学習」の現況とその現状分析を中心テーマとする論稿である。したがって、本稿は本学で実施したアンケートの結果を分析した前稿¹⁾に引き続く、言わば「続号」に値するものでもある。本稿の主な構成は、本学の第2外国語となる「韓国語」選択必修科目の受講者を対象に設問調査を実施し、それを分析する内容となっている。具体的に言えば、韓国語を学習していく過程の中で、最初の第2外国語を選択した時に抱いた韓国と韓国語に対するイメージ（認識）と語学学習の目標とが学期終了の時点で如何に変化するのかに関する追跡調査を行ったのが本稿である。

本稿の目的は、「第2外国語」、特に韓国語の授業に関する到達度または満足度を設問調査の対象とし、学習開始時と各学期終了の直前の2回にわたる調査結果を計量的な方法を用いて分析する点である。その折に本稿の調査対象となるのは、以下の二つの学部学生である。厳密に言えば、本学の第2外国語として韓国語を選択した全ての受講者ではなく、「文学部・心理学科」と「商学部」の1年次に限定しての受講者である。さらに言えば、第2外国語としての本学における「韓国語」の学習現況を綿密に分析した後に、その分析結果を基に今後の第2外国語の授業改善の作業に反映するの、一つの狙いとしている。

2. 文・心理・商学部の「韓国語Ⅰ・Ⅱ」学習者に対するアンケート調査（第2回目・第3回目）の結果と分析

2.1. アンケート調査の目的

本調査の目的は、第2外国語としての韓国語の受講者に対する1回目の調査結果を基に2回目・3回目の調査結果と合わせて分析することである。その際に、彼らの受講動機や、受講者自身が設定する到達目標とその学習上の要望レベル、韓国語の習得後の活用度をも考察する。その上で究極的には韓国と韓国語に対するイメージなどが学習の進展とともに、どのように変化するかを把握することである。それを基に、本学の韓国語教育の方向設定やカリキュラムの改善への取り組みおよびシラバスの作成の際に活用するための基礎資料の収集をも目的に据える調査の実施となる。

2.2. アンケート調査の概要

本調査の概要は、以下のとおりである。

- 1) 実施時期 : 第2回目2013年7月9日または10日
第3回目2013年12月17日または18日
- 2) 調査方式 : 無記名による選択回答や記述形式
- 3) 調査対象 : 「文・心理・商学部」(KA・KBクラス)
1年次の受講者
- 4) 回答者数 : ①文学部・心理学科
第2回目66名(男:32名/女:34名)
第3回目60名(男:27名/女:33名)
②商学部
第2回目74名(男:39名/女:35名)
第3回目76名(男:41名/女:35名)

2.3. 第2回目アンケートの調査内容と回答結果

2.3.1. 韓国語の学習目標の実現状況

本節の課題は、春学期が終わる直前(約4か月間の学習期間)に韓国語を受講している学生に対する韓国語の修得状況に関する現状を分析することである。それと関わって、本節は学生自身による自己評価を調べる目的で、アンケート調査を実施し、その現状をまとめている。その結果、現時点で受講者自らが韓国語能力をどう自己評価するのかの項目に関しては、以下の

ような回答が得られている。まず上記の項目に関する回答では、〈表1〉のように文学部・心理学科と商学部の両学部ともに、「⑤「子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が最も多くなっている。その次には「④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める」が続く。

次に本学の春学期終了時に受講者による韓国語学習の到達点の一般目標として筆者（教員側）は、学習能力の達成度を測定する際に、「⑤「子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字が読める」を基本的な目安と設定している。その結果、春学期の最終授業の直前（14回目の授業）時に行われるアンケートを勘案すると次のような解釈も可能である。すなわち、学習能力の「④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める」と回答した受講者も、概ね学習目標を達成したとみなすのも可能となると判断される点である。

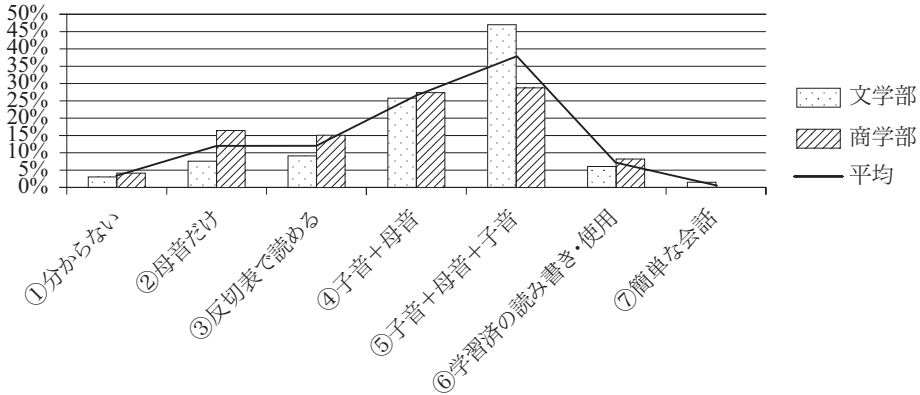
上記のような設定目標を念頭におき、次には春学期が終わる直前に文学部・心理学科と商学部の受講者を対象とした調査結果を調べてみると、以下のようになる。そこには、後者の受講者よりも前者の受講者のほうが、「⑤「子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」と回答した学生が18.2%（10名）多いことが示されている。それは韓国語を受講する際に、受講者らによるその学習目標の実現状況の差から現れるものであると考えられる。その

〈表1〉学習目標の実現状況（2回目）

「文学部」		単位：名		
学習目標の実現状況	全体	男性	女性	
①子音と母音が全く分からない	2 (3.0%)	2	0	
②母音だけなら読める	5 (7.6%)	4	1	
③韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	6 (9.1%)	5	1	
④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める	17 (25.8%)	7	10	
⑤「子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める	31 (47.0%)	13	18	
⑥学習した単語なら読み書き及び使用することができる	4 (6.1%)	0	4	
⑦簡単な会話ならできる	1 (1.5%)	1	0	

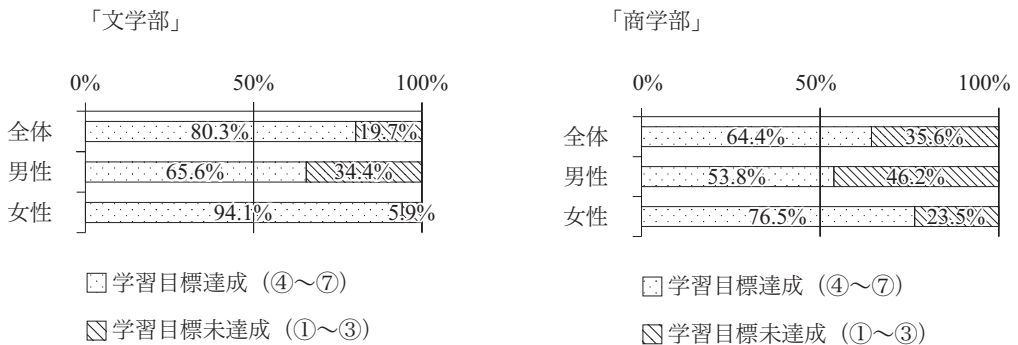
「商学部」		単位：名		
学習目標の実現状況	全体	男性	女性	
①子音と母音が全く分からない	3 (4.1%)	2	1	
②母音だけなら読める	12 (16.4%)	8	4	
③韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	11 (15.1%)	8	3	
④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める	20 (27.4%)	7	13	
⑤「子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める	21 (28.8%)	11	10	
⑥学習した単語なら読み書き及び使用することができる	6 (8.2%)	3	3	
⑦簡単な会話ならできる	0 (0%)	0	0	

中で、本学の学習設定の目標より上のレベルで自己評価を下した受講者が15.8%（11名）も存在する点は、注目に値する。



〈図1〉学習目標の実現状況（2回目）

以上の調査結果を踏まえて、次にはまず4か月間にわたっての授業が終了した後に、受講者が最初に設定した学習目標とその達成度との相関関係を調べてみると、後述のような結果が得られる。それを検証するために、第一にその目標に到達していると思われる韓国語能力の④～⑦までを回答に選んだ受講者の回答内容に対する分析を行なった。第二に、その学習目標のレベルまでには到達していないと思われる①～③までを回答に選んだ受講者の回答内容に対する分析を行なった。その両者に関する分析結果は概ね以下のとおりである。



〈図2〉学習目標達成度（2回目）

まず文学部の受講者は、4か月間の学習目標の達成値の目安となる「④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める」という回答をもとに分析すると、以下のような達成率を示している。すなわち④を始めとし、それ以上の⑤・⑥・⑦を選んだ受講者は、全体の80.3%に達

した結果となる。さらに男女別に分けてみると、男子学生は男子全体の65.6%が学習目標を達成している。それに比べて、女子学生は女子全体の94.1%である。そこには、男子学生に比べて女子学生が非常に高い割合で学習目標を達成したことが示されている。

次に商学部の受講者は、4か月間の学習目標の目安である「④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める」からそれ以上の⑤・⑥・⑦の中で後者を選んだ受講者は、全体の64.4%に達している。そこから考えれば、残りの35.6%に当たる受講者は学習目標が未達成の状況のままであるという意味となる。さらに男女別に分けてみると、男子学生は男子全体の53.8%が学習目標を達成している。その反面に、ほぼ半分にあたる46.2%の男子学生は、学習目標が達成できないままの状態に留まっている。それに対して女子学生の場合、女子全体の76.5%が学習目標を達成していることを示している。

以上をまとめると、文学部の受講者の場合、学習目標は全体の80.3%の到達率を示している。それを第2外国語の学習開始から4か月間を終了した（2回目の調査）時点で商学部と比較すると、前者の方が高い数値の達成度を示している。言い換えれば、前者の受講者は後者の受講者よりその満足度が高くなっている。さらに両学部を男女別に比較する場合、両学部ともに女子学生の達成度が高くなっている。特に女子学生の場合、その達成度が94.1%にも上るのは、受講者のほとんどが学習目標を達成する数字である点、しかも女子学生の単位未修得者は皆無である点で注目に値する。

2.3.2. 韓国語学習の到達目標

以下は、韓国語の受講者に対する学習意欲とその到達目標を調べる目的で、「大学在学の期間中にどのレベルまで韓国語を学習したいと思いますか」という質問項目を設け、その回答を求めたものである。

すなわち次の〈表2〉は、その調査結果を簡潔に表すために表にまとめたものである。その韓国語学習の到達目標を測る項目に対する回答内容は、以下のとおりである。まず男子学生の場合、「②簡単な会話が成り立つまで」が29名と最も多くなっている。さらに「①簡単なあいさつができるまで」が28名であって、その次に「③一人で韓国での旅行ができるまで」が10名と続く。上述の結果を分析すると、その到達目標の項目が6つもある中で、①～③までの項目を設定する点は、男子学生の場合、その設定目標が低いことを示している。

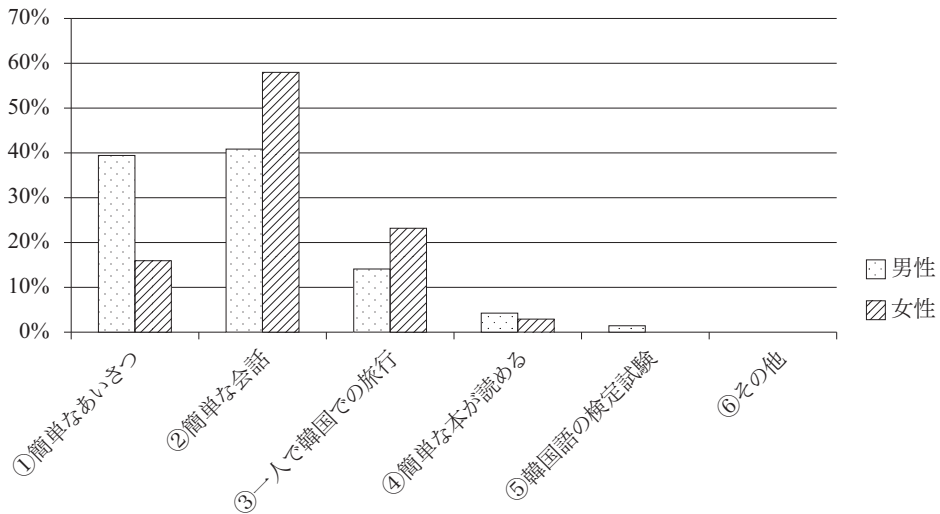
その一方で、女子学生の場合、「②簡単な会話が成り立つまで」が40名と最も多くなっている。それは、男子学生の数値と同様である。その次に「③一人で韓国旅行ができるまで」が16名と続き、その外に「①簡単なあいさつができるまで」が11名と続く。〈図3〉は、その割合を男女別に分けてグラフに表したものである。以上の調査結果から分析すると、性別によつ

て到達度が異なる点を示しているのが特徴的である。そこには、女子学生は男子学生に比べて韓国語学習の到達目標を高く設定していることが示唆されている。

〈表2〉学習到達目標（2回目）

単位：名

到達目標	全体		文学部		商学部	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
①簡単なあいさつができるまで	28	11	17	5	11	6
②簡単な会話が成り立つまで	29	40	10	19	19	21
③一人で韓国での旅行ができるまで	10	16	2	10	8	6
④簡単な本が読めるまで	3	2	2	0	1	2
⑤韓国語の検定試験に受かるまで	1	0	1	0	0	0
⑥その他	0	0	0	0	0	0



〈図3〉学習到達目標（男女別）

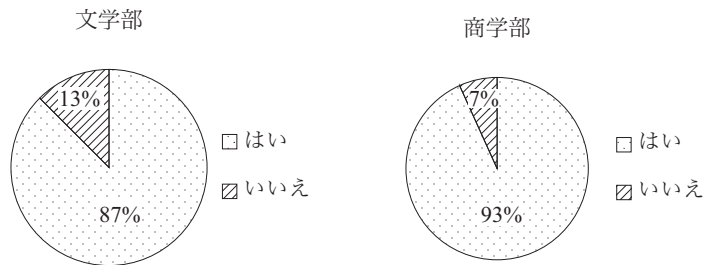
2.3.3. 韓国語を選択してよかったのか

次に2回目のアンケート調査では、第2外国語として韓国語選択に対しての満足度を調べる目的で、以下のような設問項目を設定した。その設問項目の内容は、4か月間にわたって韓国語を学習した後に、最初の動機付与の観点がどのように変わったかを調べるためのものである。その具体的な内容は、第2外国語の「選択必修科目として韓国語を選択してよかったと思うか」という設問である。その設問に対して、女子学生の場合、両学部の受講者はともに全員が第2外国語として韓国語を選択してよかったという回答が得られている。

上述のような女子学生の一致した回答内容に対して、男子学生の回答内容が若干異なる結果を見せている。すなわち男子学生の場合、文学部では8名、商学部では5名が韓国語を選択してよかったとは思わないと回答している。そこには両学部の男子学生の中の若干名は、女子学生に比べて幾分動機付与の観点下がったことを示している。

〈表3〉韓国語選択の満足可否（2回目）

「文学部」			「商学部」		
	単位：名			単位：名	
	はい	いいえ		はい	いいえ
男性	23	8	男性	34	5
女性	33	0	女性	35	0
全体	56	8	全体	69	5



〈図4〉韓国語選択の満足可否の比率（2回目）

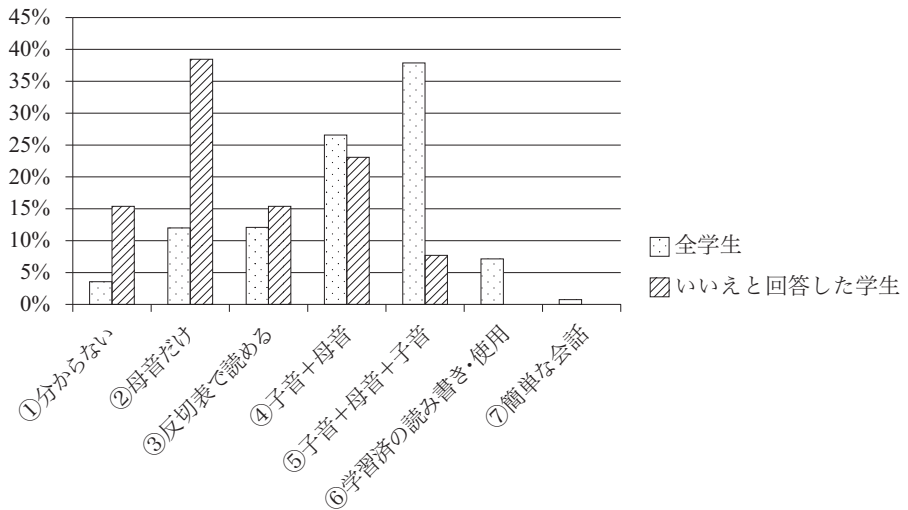
〈表4〉韓国語の選択に満足している理由（2回目）

男子学生		女子学生	
(他の) 外国語より簡単	6名	楽しい	7名
分かりやすい	4名	(他の) 外国語より簡単	5名
日本語と似ていて簡単	3名	言葉が理解できる	4名
授業が楽しい	3名	将来役に立つ	4名
韓国語への興味	2名	韓国やアイドルに興味	4名
		分かりやすい	3名
		基礎からなので出来そう	3名
授業が楽しい	10名	楽しい	12名
(他の) 外国語より簡単	9名	将来役に立つ	5名
分かりやすい	6名	韓国や韓国ドラマに興味	4名
韓国で使用したい	3名	言葉が理解できる	3名
街やドラマで理解可	3名	韓国のドラマの字幕などが分かるようになった	3名
将来役に立つかも	1名	分かりやすい	1名
友達ができた	1名	友達ができた	1名

上記のような設問項目と連動する形で「韓国語を選んでよかった」を回答として選んだ学生に対して、その具体的な理由を聞いた結果、〈表4〉のような回答内容が挙げられている。

〈表5〉韓国語の選択に満足していない理由（2回目）

	男子学生	女子学生
文学部	難しい	5名
	つまらない	2名
	覚える単語の数が多	1名
商学部	(とても) 難しい	3名
	文字が複雑で難しい	1名
	つまらない	1名



〈図5〉学習目標の実現度（韓国語選択の満足の可否別）

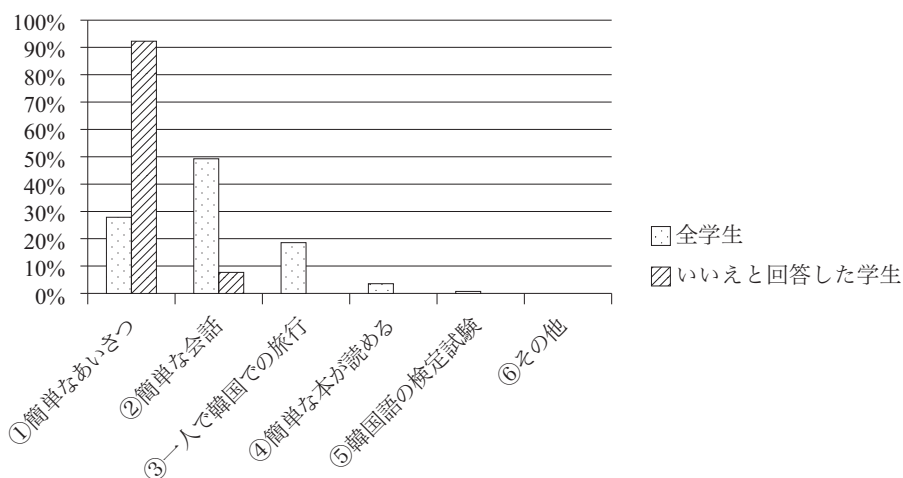
上記のような回答の中で「韓国語を選択してよかったとは思わない」と回答した13名の学習状況の中身を具体的に調べてみると、文学部の中の8名の場合、その分布はまず「①子音と母音が全く分からない」が2名、「②母音だけなら読める」が2名である。そして、「③韓国語の反切表を見ながらなら文字が読める」が1名、「④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める」が2名、「⑤「子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が1名となっている。商学部5名の場合、その分布は「②母音だけなら読める」が3名、「③韓国語の反切表を見ながらなら文字が読める」が1名、「④「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める」が1名と分かっている。これを学生平均と比べると、〈図5〉のように学習

目標の実現度が明らかに低いことが示されている。

そこで問題となるのは、受講者の習得度（達成度）が低くなる原因が不明確な点である。その低下の原因が学習意欲から来るものなのか、学習能力の問題なのか、または別の原因があるのか今回の回答内容だけでは非常に曖昧である。その一つの要因は、最初に第2外国語を受講する際に、その習得（達成）目標を低く設定する傾向と関連していると考えられる。その傍ら、少なくとも学生が第2外国語としての韓国語を選択した場合、その満足度を高めるために学習実現度を精査し、今後何らかの対策を講じるのも必要となると判断される。

その反面、第2外国語としての「韓国語を選んでよかったと思わない」という受講者の回答の中で、その具体的な理由として挙げられるのは、〈表5〉のような内容が記されている。その回答内容を詳しく調べてみると、まず「難しい」が8名、「つまらない」が3名、「文字が複雑で難しい」が1名、「覚える単語の数が多いと思う」が1名となっている。上記の13名の受講者の中で最初の段階における韓国語学習の到達目標は、文学部の8名全員が「①簡単なあいさつができるまで」、商学部は5名中4名が「①簡単なあいさつができるまで」、残りの1名が「②簡単な会話が成り立つまで」となっている。

以上を上記の二つの学部における第2外国語としての韓国語を学習する全受講者の平均値と比較すると、その学習能力を高めるための設定目標が相当低く設定されている状況が〈図6〉で示されている。そこには「韓国語を選んでよかったと思わない」と回答した学生の場合、最初の段階から第2外国語の学習到達の目標設定が低く、その設定意識が学期終了時まで続いている点が示されている。



〈図6〉学習到達目標（韓国語選択の満足の可否別）（2回目）

2.4. 第3回目アンケートの調査内容と回答結果

2.4.1. 韓国語の学習目標と実現状況

秋学期が終わる直前に、約8か月間にわたって韓国語を学習した受講者を対象として、現時点での韓国語能力に対する学生自身による自己評価を問うてみた。その結果、文学部と商学部との両学部の受講者の間では、以下のような学習実現の状況上の差が現れている。それを表で現したのが、以下の〈表6〉と〈図7〉である。

まず文学部の受講者の場合、その現況を調べてみれば、「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」という回答が最も多く見られる。その次には「④「子音+母音+子音(パッチム)」の組み合わせの文字も読める」が続く。

その一方で、商学部における韓国語の受講者の場合、「④「子音+母音+子音(パッチム)」の組み合わせの文字も読める」が最も多い回答として挙げられる。その次には「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」が続く。上記のような調査の結果は、韓国語を選択する際に、受講者が学習目標を低く設定する場合、その学習実現度もそれに連動する形で低

〈表6〉学習目標の実現状況（3回目）

「文学部」

単位：名

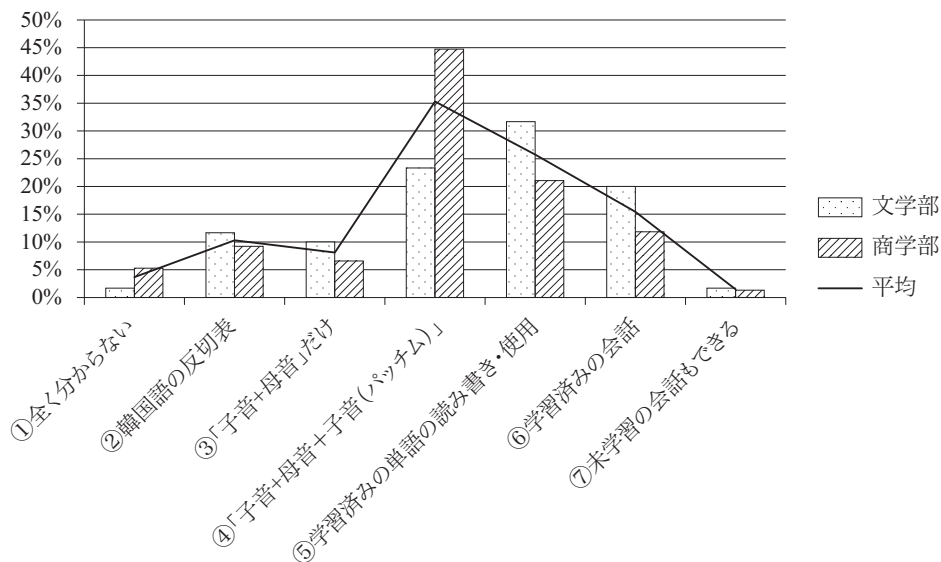
学習目標の実現状況	全体	男性	女性
①子音と母音が全く分からない	1 (1.7%)	0	1
②韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	7 (11.7%)	6	1
③「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める	6 (10%)	3	3
④「子音+母音+子音(パッチム)」の組み合わせの文字も読める	14 (23.3%)	7	7
⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる	19 (31.7%)	9	10
⑥学習済みの会話ならできる	12 (20%)	2	10
⑦まだ学習していない会話もできる	1 (1.7%)	0	1
⑧手紙が書ける	0 (0%)	0	0

「商学部」

単位：名

学習目標の実現状況	全体	男性	女性
①子音と母音が全く分からない	4 (5.3%)	3	1
②韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	7 (9.2%)	6	1
③「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める	5 (6.6%)	4	1
④「子音+母音+子音(パッチム)」の組み合わせの文字も読める	34 (44.7%)	16	18
⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる	16 (21.1%)	9	7
⑥学習済みの会話ならできる	9 (11.8%)	3	6
⑦まだ学習していない会話もできる	1 (1.3%)	0	1
⑧手紙が書ける	0 (0%)	0	0

くなる傾向を示唆している。



〈図7〉学習目標の実現状況（3回目）

次に上記の設定項目に関わって、受講者による自己評価に対して性別に分けて調べてみると、以下のような評価内容となる。まず商学部の受講者の場合、男女による自己評価の差はほとんど見られず、性差にあまり関係なく、ほぼ同等の結果が得られている。その一方で、文学部の受講者の場合、商学部の受講者による自己評価と違って来る。すなわち文学部の学生は、次のように男女別の差によってその回答上にある程度の変化が見られる点で特徴的である。

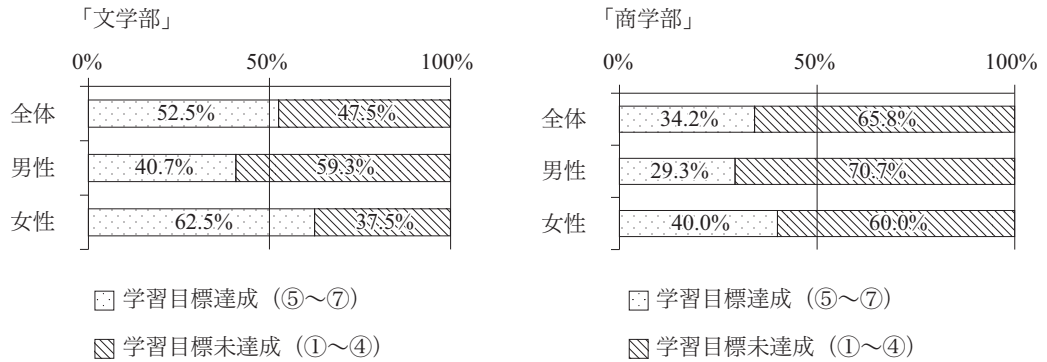
特に文学部の女子学生の場合、現時点における学生自身による韓国語能力に対する自己評価は、「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」と、「⑥学習済みの会話ならできる」とが全く同人数で最も多くを占めている。それに対して、文学部の男子学生の場合、「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」が最も数多く見られる。その次の自己評価には、「④「子音+母音+子音(パッチム)」の組み合わせの文字も読める」が続く。

以上のように、文学部の受講者の場合、男子学生に比べて女子学生の方が高い学習目標に達したことを示している。その理由は、最初の学習目標を設定する段階から、男子学生と比較して高い目標を目指しているためであると考えられる。その目標の設定は、学期終了時までには揺るがずに続けられ、一定の成果を納める結果につながると考えられる。

本学の韓国語選択必修の授業では、秋学期までの学習目標を、その学習能力の到達値の目安と絡めて「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」と設定している。した

がって、3回目のアンケート調査の実施時においては、回答内容が「⑤」以上であれば、概ね学習目標の実現済みと認められる。その点を評価基準に据えて、〈図8〉を分析して見ると、以下のような結果が得られている。すなわち文学部の女子学生は、同学部の男子学生や商学部の男女学生に比べても韓国語の学習目標の実現度が多少高いことを示している。

以下では、8か月間にわたる韓国語の学習を行った後に、まずその学習目標まで到達済みと認められる上記の評価基準に沿って検討した。その際に、韓国語能力の⑤～⑦までを回答した学生の回答内容を計量的に分析した。それを基準に、その学習目標には到達していない回答に対する分析も行った。すなわち、①～④までを回答した学生の回答内容も計量的に分析し、その両者を比較する作業を行った。その結果は、以下のとおりとなっている。



〈図8〉学習目標達成度（3回目）

文学部の受講者は、約8か月間にわたる韓国語の学習後の到達目標の目安となる「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」を一つの標準的な到達目標としての設定から韓国語の学習を始めている。その結果⑤を始めとし、それ以上の⑥・⑦を選んだ学生は男女受講者全体の52.5%にも上っている。さらに男女別の差でみると、男子学生は男子全体の40.7%が学習目標を達成している。その一方で、女子学生は女子全体の62.5%が学習目標に到達した結果となる。その事実から、文学部では男子受講者に比べ女子受講者のほうが学習目標を達成する割合が高いことを示している。

商学部の受講者は、8か月間の学習目標の目安となる「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」から韓国語の学習を開始している。その時に⑤を含むとともに、それ以上の⑥・⑦を選んだ学生は全体の34.2%となっている。さらに男女別の差でみると、男子学生は男子全体の29.3%が学習目標に到達している。その反面に、女子学生は女子全体の40.0%が学習目標を達成した結果となる。その事実から、商学部でも文学部の受講者と同様に、男子受講者に比べ女子受講者は学習目標の達成率が高い割合を示している。

そこには、文学部と商学部の学生を比較すると、文学部の受講者の場合、その学習目標の達成率が高くなっている。その反面、商学部の受講者の場合、学習目標の到達済みと認められる学生の割合は、18.3%低くなっている。文学部の受講者の場合、男子学生に比べて女子学生は学習目標より21.8%高い達成率を示している。上述の両学部の差と男女学生の差は、最初の段階で学習目標を低く設定する点から生じるものと推察される。後述のように、その結果は最初の学習目標の設定レベルがそのまま到達目標に反映される形で現れている。

2.4.2. 韓国語学習の到達目標

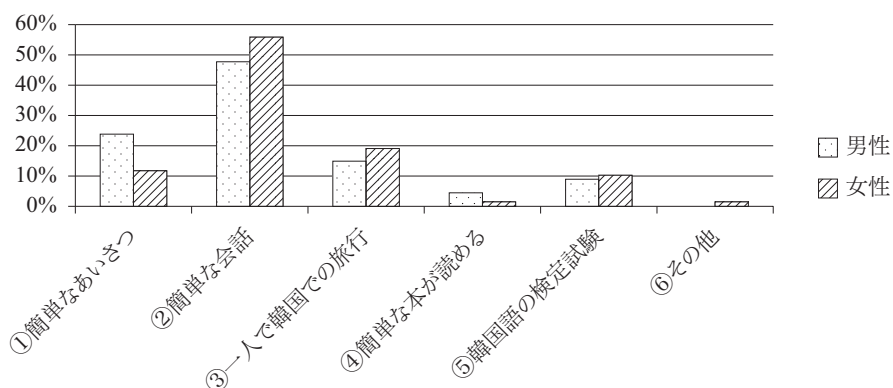
上述のような設問内容と関わって、韓国語の受講者に対する初期段階から成る学習意欲とその到達目標との因果関係を調べるために、以下のような設問項目を設けた。すなわち、「大学在学の期間中にどのレベルまで韓国語を学習したいと思いますか」という項目である。

次の〈表7〉と〈図9〉は、上述のような質問項目に対する調査結果をまとめたものである

〈表7〉学習到達目標（3回目）

単位：名

	全体		文学部		商学部	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
①簡単なあいさつができるまで	16	8	7	4	9	4
②簡単な会話が成り立つまで	32	38	13	16	19	22
③一人で韓国での旅行ができるまで	10	13	4	8	6	5
④簡単な本が読めるまで	3	1	2	0	1	1
⑤韓国語の検定試験に受かるまで	6	7	1	4	5	3
⑥その他	0	1	0	1	0	0



〈図9〉学習到達目標（男女別）（3回目）

る。韓国語を学習する際の到達目標を測る項目に対する回答には、男子学生は「②簡単な会話が成り立つまで」が最も多く、次に「①簡単なあいさつができるまで」と続く。そして「③一人で韓国での旅行ができるまで」である。その一方、女子学生は「②簡単な会話が成り立つまで」が男子学生と同様に最も多くなっている。その次に「③一人で韓国旅行ができるまで」の回答が続く。そして「①簡単なあいさつができるまで」の回答となっている。

既述のように上記のような調査結果は、女子学生の場合、韓国語を学習する最初の段階からすでに男子学生に比べて韓国語学習の到達目標を高く設定する傾向を示している。その点は、男子学生と比べて女子学生の方が学習意欲の面でも若干高いことを示唆している。

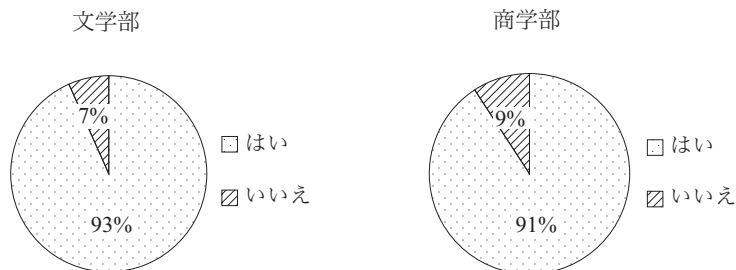
2.4.3. 韓国語選択に対する満足度

次には、第2外国語としての韓国語を選択した際に、その学習目標と絡めた形で、韓国語選択に対する満足度の問題に関する受講者自身の自己評価を問うてみた。そのために、約8ヵ月間にわたる韓国語の学習を行った後、選択必修科目として韓国語を選択してよかったと思うのかどうかの設問項目を設けた。その結果、文学部では4名（男子3名/女子1名）、商学部では7名（全員男子）の受講者から「韓国語を選択してよかったとは思わない」という回答が得られている。それに対する分析は、さらに後述する。

その反面に、「韓国語を選んでよかった」を回答として選んだ学生に対してその具体的な理由を聞いた結果、以下の〈表9〉のような内容が挙げられている。

〈表8〉韓国語選択の満足の可否（3回目）

「文学部」			「商学部」		
	単位：名			単位：名	
	はい	いいえ		はい	いいえ
男性	24	3	男性	34	7
女性	32	1	女性	35	0
全体	56	4	全体	69	7



〈図10〉韓国語選択の満足の可否率（3回目）

〈表9〉韓国語の選択に満足している理由（3回目）

単位：名

	男子学生		女子学生	
文学部	分かりやすい	5名	楽しい	6名
	授業が楽しい	4名	言葉が理解できるようになった	5名
	韓国語への興味	3名	(他の) 外国語より簡単	1名
	日本語と似ていて簡単	3名	分かりやすい	1名
	(他の) 外国語より簡単	1名	基礎からなので出来そう	1名
	言語の知識が広がった	1名	将来役に立つ	1名
			韓国や韓国のアイドルに興味がある	1名
商学部	街やドラマで理解可	5名	言葉が理解できるようになった	11名
	(他の) 外国語より簡単	4名	楽しい	6名
	分かりやすい	3名	韓国のドラマの字幕などが分かるようになった	3名
	授業が楽しい	3名	分かりやすい	2名
	韓国で使用したい	2名	英語より分かりやすい	2名
	英語以外の話せる言語	2名	韓国で使用したい	2名
	将来役に立つかも	1名	友達ができた	1名
			他の外国語より楽	1名
			日本語と似ている	1名
		母親も好き	1名	

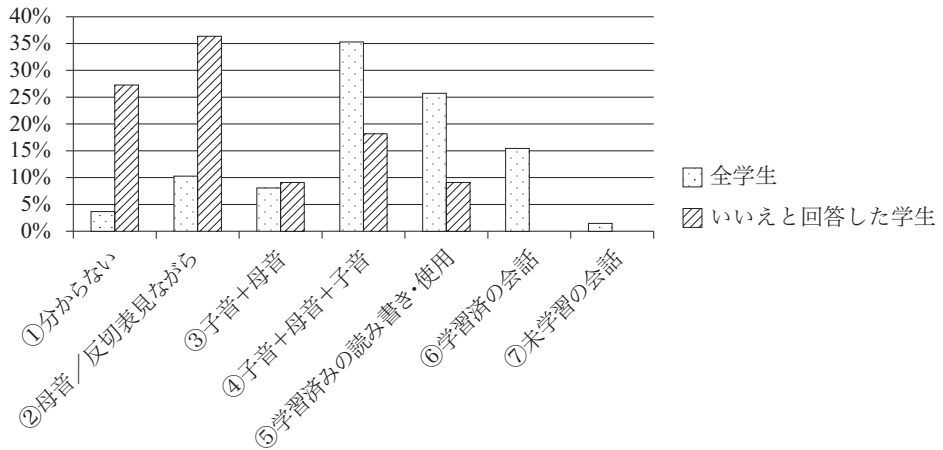
〈表10〉韓国語の選択に満足していない理由（3回目）

単位：名

	男子学生		女子学生	
文学部	英語がちっとも分からないので他のことなんて分からない	1名	難しい	1名
商学部	難しい	2名	/	
	思っていたよりかなり難しかった	1名		
	文字を書くのが難しい	1名		
	よく分からない	1名		

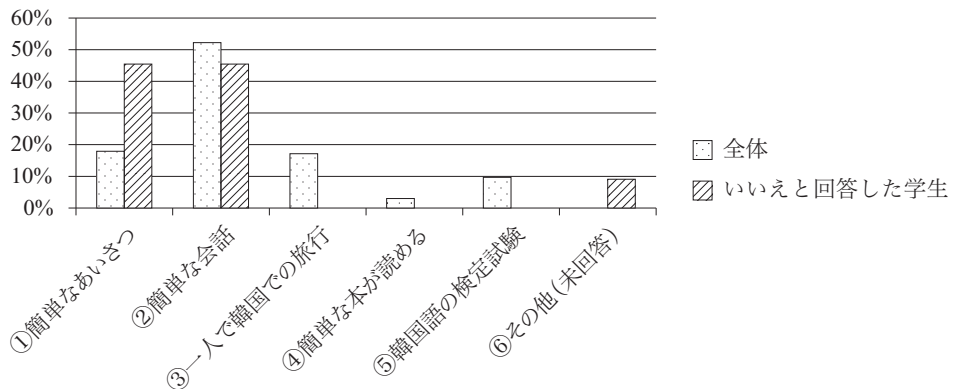
※文学部の男子学生2名無記入、商学部の男子学生2名無記入

上記のような設問項目に対して、「韓国語を選択してよかったとは思わない」と回答した11名の学習内容の最終的な実現状況を調べてみると、概ね〈表10〉のようになっている。まず文学部の受講者の場合、その受講者の内4名は、第2外国語としての韓国語の選択に対して積極性を欠く、非常に消極的な回答内容となっている。その詳細な内訳は、「①」が1名、「②」が2名、「③」が1名である。また彼らの学習目標は、「①」が3名、「②」が1名となっている。



〈図11〉学習目標の実現度（韓国語選択の満足の可否別）

次に商学部を受講者の場合、文学部と同様の回答内容が7名となっている。その学習の実現状況を調べてみると、「①」が2名、「②」が2名、「④」が2名、「⑤」が1名である。その学生らの学習目標は「①」が2名、「②」が4名、無記入が1名である。以上をまとめると、概ね次のような分析結果が得られる。すなわち、韓国語受講の開始段階でその学習目標を低く設定する学生の場合、その学習実現度もその学習目標に連動する形で低くなる傾向を示している。



〈図12〉学習到達目標（韓国語選択の満足の可否別）（3回目）

加えて言えば、「韓国語を選んでよかった」と思わないと回答した学生によって学習開始時に設定されている習得目標と、その実現状況は、韓国語を選んでよかったと思うと回答した学生よりも韓国語の習得とその使用可能な韓国語の範囲も狭く、習得済みの韓国語を使つての会

話が可能なレベルも低いことが示唆されている。

上記のような設問に関する回答内容を綿密に調べてみると、「韓国語を選んでよかったと思わない」理由は、以下の内容となる。すなわち、「難しい」が5名、「分からない」が1名、「英語すらまともに分からないので他のことなんてわからない」が1名である。上記のような回答は、その内容が「具体性」を欠く。例えば「英語すら」云々の行は実証性を欠く曖昧な内容である。すなわち、英語が上手くできれば、韓国語も自然に習得できる意味なのか、英語が上手くなければ、韓国語も下手になる意味なのかが不鮮明なのである。

3. 文・心理・商学部の「韓国語Ⅰ・Ⅱ」学習者に対するアンケート調査（1回目・2回目・3回目）の結果分析

3.1. 韓国語学習目標の実現状況

本節は、約4か月間の学習期間終了後に行った2回目のアンケートと約10か月間の学習期間終了後の3回目のアンケートで行った結果を分析している。〈表11〉は、上記の2回にわたる調査をもとに学習目標に対する受講者自身による学習目標の実現状況に関する調査結果を比較分析したものである。

〈表11〉学習目標の実現状況（2回目・3回目）

単位：名

学習能力	全体				文学部				商学部			
	男子		女子		男子		女子		男子		女子	
	2回	3回	2回	3回	2回	3回	2回	3回	2回	3回	2回	3回
①	4	3	1	2	2	0	0	1	2	3	1	1
②	25	12	9	3	9	6	2	2	16	6	7	1
③	14	7	23	4	7	3	10	3	7	4	13	1
④	24	23	28	25	13	7	18	7	11	16	10	18
⑤	3	18	7	17	0	9	4	10	3	9	3	7
⑥	1	5	0	16	1	2	0	10	0	3	0	6
⑦	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	1
平均値	3	3.8	3.5	4.6	3.1	3.9	3.7	4.7	2.9	3.8	3.2	4.5
伸び率	0.8		1.1		0.8		1		0.8		1.3	

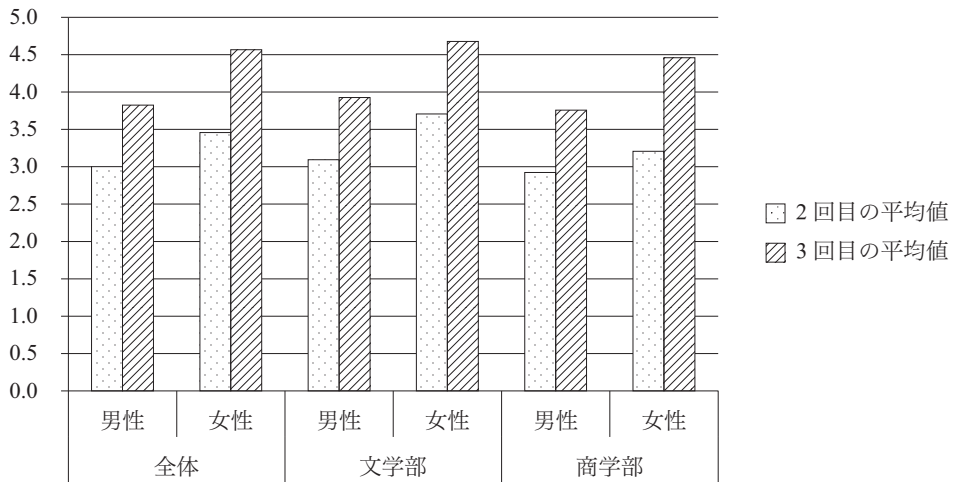
※平均値とは、①～⑦の項目をそれぞれ1～7に数値化したときの平均値。

※増減差とは、2回目のアンケート結果の平均値に対する増減差。

上の〈表11〉は、2回目のアンケートでの選択項目として「②母音だけなら読める」と「③

韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める」と区別したものである。だが、3回目のアンケートでは「②韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める」に一本化したため、上記の集計表では2回目の②と③の回答合計を②として集計したことを予め断わっておく。その理由として2回目の②の選択項目は、約10か月間の学習期間の経過を前提にしたときの3回目のアンケートの③の選択項目にその内容が十分含まれていると判断したためである。

さて、学習目標の実現度の回答番号①～⑦を各々1～7の数値として平均値を算出した結果、学部別や男女別を問わず、2回目のアンケートではおおよそ③のレベルが平均値の回答となっている。それが3回目のアンケートでは④に近くなり、平均的には1段階上にレベル・アップされたと認定できる傾向が読み取れる。その伸び率は、両学部ともに男性に比べて女性のほうが若干高い傾向を示している。



〈図13〉学習目標の実現状況（伸び率）

3.2. 韓国語学習の到達目標

本節は、韓国語の受講者自身の学習意欲とその時間的な経過に伴って、以前の到達目標を設定し直したのかを調べた結果である。1回目から3回目までの調査結果を比較してみると、以下の〈表12〉のようになる。

韓国語学習の到達目標を検討した結果、1回目のアンケートと2回目のアンケートでは変化が見られる。その到達目標の平均値は男女ともに若干下がる傾向が見られる。それが3回目のアンケートになると、平均値は男女ともに上がっている。その原因は、到達目標として最も低い設定である「①簡単なあいさつができるまで」を選んだ学生の回答の変化である、と推察される。すなわち、その受講者らの場合、学習の進展や語学力の上達に伴う3回目のアンケート

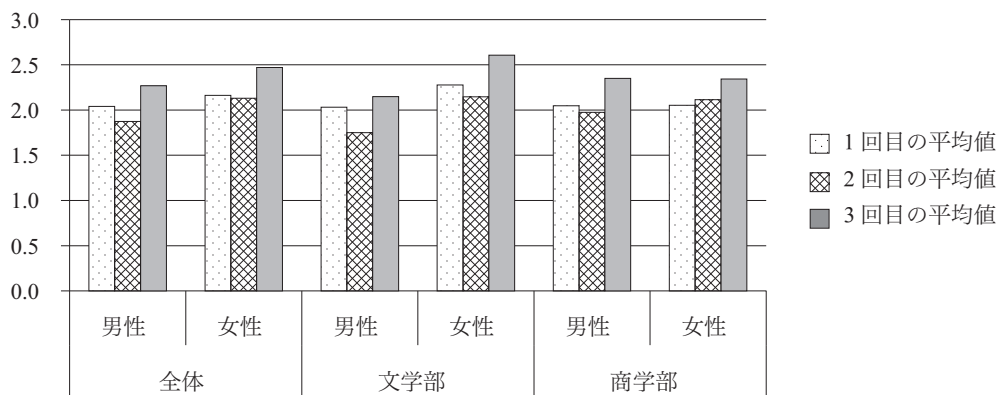
〈表12〉学習到達目標（1回目・2回目・3回目）

単位：名

学習能力	全体						文学部						商学部					
	男子			女子			男子			女子			男子			女子		
	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回
①	19	28	16	17	11	8	11	17	7	7	5	4	8	11	9	10	6	4
②	39	29	32	36	40	38	12	10	13	17	19	16	27	19	19	19	21	22
③	11	10	10	16	16	13	5	2	4	9	10	8	6	8	6	7	6	5
④	4	3	3	2	2	1	2	2	2	1	0	0	2	1	1	1	2	1
⑤	1	1	6	3	0	7	1	1	1	2	0	4	0	0	5	1	0	3
⑥	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
平均値	2	1.9	2.3	2.2	2.1	2.5	2	1.8	2.1	2.3	2.1	2.6	2	2	2.4	2.1	2.1	2.3
増減差		-0.2	0.2		0	0.3		-0.3	0.1		-0.1	0.3		-0.1	0.3		0.1	0.3

※平均値とは、①～⑥の項目をそれぞれ1～6に数値化したときの平均値。

※増減差とは、1回目のアンケート結果の平均値に対する増減差。



〈図14〉学習到達目標（増減差）

では①の回答数が減っている。その一方で、一部の受講者は到達目標として高い設定となる「⑤韓国語検定試験に受かるまで」に変えていることが示されている。

上述の傾向と関わって、韓国語履修申請の段階で、到達目標として一番低いレベル①「簡単なあいさつができるまで」の項目に注目すると、韓国語の学習開始前では36名となっている。それが学習開始から約4か月後には39名となって以前に比べて3名増えたものの、学習開始から約8か月後には①が24名となっている。そこには、学習進行と語学力の習得に伴って学習開始時の低い目標設定が顕著に減っている傾向が示されている。すなわち、約8か月間の韓国語の学習を通じて次第に韓国語を習得するにつれ、大学での学習目標とその到達目標を以前

よりも高く設定し直した点を示している。

その到達目標について言えば、②、③、④までの回答に関してはその受講者の数の変動やその目標も無変化である。一方、高い到達目標となる「⑤韓国語の検定試験に受かる」は、韓国語の学習を開始する前は4名となっている。それが学習開始の4か月後には1名に減ったものの、学習開始の8か月後には13名へと増加する。これは、8か月間の韓国語の学習を通じて、高い水準となる韓国語の検定試験の合格を、その到達目標に置く学生の増加傾向を意味する。その数字は韓国語学習に対する満足度を示す回答であると同時に、韓国語の学習目標を高水準に設定し直す受講者の目標修正の現況を示唆している。

3.3. 韓国語の選択に対する満足度の変化

〈表13〉 韓国語選択の満足に対する可否

「文学部」		単位：名				「商学部」		単位：名			
	はい		いいえ			はい		いいえ			
	2回	3回	2回	3回		2回	3回	2回	3回		
男性	23	24	8	3	男性	34	34	5	7		
女性	33	32	0	1	女性	35	35	0	0		
全体	56	56	8	4	全体	69	69	5	7		

上記の〈表13〉で見られるように、韓国語を選択してよかったかの設問に対して、2回目（学習4か月目）のアンケートの時と3回目（学習8か月目）のアンケート時とで比較してみると、以下のような分析が可能となる。

文学部の受講者の場合、韓国語を選択してよかったと回答した学生は男子学生が23名から24名に、女子学生は33名から32名へと、各々1名の増減が見られる。その数字は、学習4か月目と学習8か月目とでは韓国語の選択に対する心理的な変化はほとんどなかったことを表している。その反面に、「韓国語を選択してよくなかった」と回答した学生は8名から4名に減っている。これは、2回目のアンケートで「韓国語を選択してよくなかった」と答えた一部の学生が、「韓国語Ⅰ」の単位を落とし、3回目のアンケート調査の実施時での「韓国語Ⅱ」を履修していない学生による減少であると推測される。

商学部の受講者の場合、韓国語を選択してよかったと回答した学生の数に変化は無く、2回目、3回目も1回目と同様に、男子学生は34名、女子学生は35名となっている。韓国語を選択してよくなかったと回答した学生は5名から7名へと、2名増えている。これは、韓国語を選んでよかったと回答した学生の数に変化がなかった事実を考慮すると、2回目のアンケート実施時の欠席者が3回目アンケート実施時には調査に加わった結果であると推測される。

以上をまとめると両学部ともに、学習4か月目と学習8か月目でのアンケート調査を比較すると、第2外国語としての韓国語の選択に対する満足度にはほとんど変化がなかったことが示されている。

3.4. 韓国語に対するイメージの変化

〈表14〉韓国語に対するイメージ（1回目・2回目・3回目）

	1回目（学習開始前）	2回目（学習4か月後）	3回目（学習8か月後）
1.	全体的に難しい（40名）	思っていたより難しい（47名）	思っていたより簡単（18名）
2.	日本語と似ている（22名）	思っていたより簡単（15名）	思っていたより難しい（16名）
3.	記号みたい（16名）	読み書きや聞き取りができるようになった（10名）	分かるようになってきた（15名）
4.	他の外国語より易しそう（17名）	韓国に行ってみみたい（1名）	日本語に似ている（6名）
5.	分からない（8名）	日本語に近い（1名）	楽しい（6名）
6.	ハングル（5名）		
7.	格好良い（3名）		
8.	K-POP（2名）		
9.	韓国ドラマ（2名）		
10.	不思議（2名）		
11.	面白そう（2名）		

次には韓国語の学習実現度による学習前と学習後の韓国語に対するイメージの変化に関する調査を行なった。その結果、韓国語のイメージとしては、まず韓国語の学習開始の前は、韓国語に対して「全体的に難しい（40名）」「日本語と似ている（22名）」「記号みたい（16名）」「他の外国語より易しそう（17名）」となっている。

そこには、学習前には韓国語に対する抽象的なイメージを持っている学生が多い状況を示している。それが学習の4か月後になると「思っていたより難しい（47名）」「思っていたより簡単（15名）」「読み書きや聞き取りができるようになった（10名）」など、韓国語を学習した結果、そのイメージが少し具体的な内容に変わってきている。

さらに、学習の8か月後のイメージでは「思っていたより簡単（18名）」「思っていたより難しい（16名）」「分かるようになってきた（15名）」「日本語に似ている（6名）」「楽しい（6名）」と言った回答内容へと変化している。そこには、最初の学習開始の段階における「思っていたより難しい」から「思っていたより簡単」への受講者の数が増えていくイメージの変化

の様子がうかがわれる。それは、韓国語の学習進展に伴って、韓国語の文法と語順および発音などで日本語との類似点を発見し、韓国語の学習のコツを掴んだことを示唆している。

4. おわりに

本稿では、第2外国語として韓国語に関するアンケート調査を分析対象とし、それを計量的な接近方法を用いて分析した。その際に、本稿ではまず調査対象となる受講者を絞ってアンケート調査を実施し、それをもとに分析作業を行った結果、概ね以下のような知見が得られている。それは第2外国語（韓国語）の場合、まず学習開始の段階における受講者による学習目標の設定が学習終了時までには連動する点である。すなわち、目標設定の段階でその目標を高く設定する学生の場合、その学習終了時の満足度が高いという知見が得られている。

次に本稿では第2外国語の場合、男子学生と比較して女子学生のほうが学習目標の達成度が高いという知見が得られている。その事実も、上述の学習目標の設定問題とも直接的に関係するものである。すなわち女子学生の場合、男子学生に比べて学習開始の段階での学習目標の設定が高く、それが学習終了期までに連動し、究極的には高い達成度につながっている。

その上本稿では、語学教育の場合、その学習目標を達成させるためには短期的な語学学習と比較して、長期の計画に基づく体系的な教育が最も有効的である点を改めて確認することが可能となっている。すなわち、多くのアンケート調査の結果は、授業の方法や改善を求める回答よりも、受講者自身による学習目標の設定に連動され、設定目標と学習効果が相互に影響し合う傾向を示唆している。

最後に前号と本号に引き続き、韓国語の達成度や学習期間と関わる韓国や韓国語のイメージの変化、学習目標とその満足度との相関関係に関して、韓国語の受講者を対象とする、更なる追跡調査を行うのが、今後の課題である。

「韓国語初級必修クラス」に関するアンケートⅢ

問1) 性別を教えてください。

- ① 男性 ② 女性

問2) 韓国語の学習期間はどれくらいですか？

- ① 10 か月
② 10 か月～1 年半未満
③ 1 年半以上～2 年未満
④ 2 年以上～3 年未満

問3) 韓国語の能力はどれくらいですか。(自己判断でよい)

- ① 子音と母音が全く分からない。
② 韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める。
③ 「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める。
④ 「子音+母音+子音(パッチム)」の組み合わせの文字も読める。
⑤ 学習した単語なら読み書き及び使用することができる。
⑥ 学習済みの会話ならできる。
⑦ まだ学習していない会話もできる。
⑧ 手紙が書ける。

問4) 第2外国語として韓国語を選んでよかったですか。

その理由を書いてください。

- ① はい ② いいえ

問5) 8 か月間韓国語を学習しました。「韓国語」についてのイメージに変化はありますか。(自由記述)

問6) 大学の在学期間中韓国語をどのレベルまで学習したいと思いますか。

- ① 簡単なあいさつができるまで
② 簡単な会話が成り立つまで
③ 一人で韓国での旅行ができるまで
④ 簡単な本が読めるまで
⑤ 韓国語の検定試験に受かるまで
⑥ その他

()

問7) 韓国語の学習においてより分かりやすい学習をするために、取り入れてほしい点はありますか。今後の参考にするので教えてください。

問8) 来年度の韓国語の選択科目を受講したいと思いますか。

- ① はい ② いいえ

注

- 1) 文嬉眞・金美淑、「日本の大学における「韓国語学習」——愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析(1)——」、『愛知学院大学教養部紀要』第61巻第4号、pp. 69-84. 愛知学院大学 (2014)